

ぼくの伯父さんの休暇 (1953)

LES VACANCES DE MONSIEUR HULOT

MR. HULOT'S HOLIDAY [米]

MONSIEUR HULOT'S HOLIDAY [英]

メディア 映画

ジャンル コメディ

製作国 フランス

色彩 B&W

時間 87分

初公開日 1963/08/03

公開情報 ヘラルド

【解説】

「ぼくの伯父さん」以前の作品（長篇第二作）で、タチの商標であるユロ氏初登場の作品だが、日本では紹介の順番が逆になり、従ってここでは“誰の伯父さんでもない”にも関わらず、この題名となった。誰もが海へと繰り出すヴァカンス時、汽車もバスもスシ詰めで旅行客を運ぶ。我らがユロ氏もまた小さなボロ車で海辺を目指す（そのヨタヨタした走りっぷりで彼が乗っていると分かる出だしはすこぶる快調）。リゾート・ホテルの扉を開けると、まさに一陣の風が吹き込み、彼がいかに“招かれざる客”であるかも分かるというもの。その宿泊客の生活の軽いスケッチをつみ重ねてくすりと笑わず術も巧みで、いつも仏頂面の支配人もおかしい。常にパイプを咥え、妙にひしゃげた帽子を被っているのがユロ氏の特徴で、自分の名前くらいしか言葉は口にしない彼のパントマイム芸でギャグを作っていく無声映画のよさがタチの喜劇の持ち味だが、ゆえに音の使い方（レコード室や車の騒音）も絶妙。そして、乗り物ギャグがまたうまい。乗っている小舟が突然真っ二つに折れ、鮫の顎のようになって海水浴客を驚かさず所などキートンも顔負けだ。そして、そこはかたなく漂う詩情――例えば、アイスクリーム・コーンを二つ買う小さな坊やをずっと追って、そいつを落としたりしないかと映画のスリルを醸し、実に微笑ましくオトしてみせる技はただものではない――もゆたか。最後、みなが握手で別れの挨拶を交わす中、迷惑男のユロ氏のみ仲間はずれなのだが、彼とはなぜか波調が合うと思いついてる英国婦人と、おっかないカミさんの尻に敷かれながら彼の様子を好ましく見つめていた老紳士だけがそっと声をかけ、色々あった夏の休暇も終わる。そして、クロージング・ショットの浜辺の風景がそのまま絵葉書になる終わらせ方など実にシャレもいる、味わい深いコメディだ。

【クレジット】

監督	ジャック・タチ	Jacques Tati
脚本	ジャック・タチ	Jacques Tati
	アンリ・マルケ	Henri Marquet
撮影	ジャン・ムーセル	
	ジャック・メルカントン	Jacques Mercanton
出演	ジャック・タチ	Jacques Tati
	ナタリー・パスコー	
	アンドレ・デュボワ	
	ヴァランティーヌ・カマクス	